
E L E M E N T S ! - 鎮魂歌 -

D

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ELEMENTS！ - 鎮魂歌 -

【Nコード】

N1797A

【作者名】

D

【あらすじ】

精霊科学によって文明発達した精霊皇国都市アスラ この巨大都市の治安を守る組織、精霊術士隊を狙う『ソウルイーター』。その犯人を追う三人の術士は、人類と精霊の根源に辿り着く。

Prologue

冷気を帯びたガスが視界を覆っている。

暫くしてガスが空気中に霧散すると、薄暗闇の中に冷たい灰色をした壁が現れる。

そして唸るような駆動音を発する棺桶にも似た形の黒い装置が部屋の中央に鎮座し、装置から伸びた何本もの管が、成人の何倍もの大きさをそびえる硝子台に繋がっているのが覗える。

「こ、これは一体……!?」

眼鏡の曇りを拭い、男はそれをしかと凝視した。

硝子台の中に充満した緑色の培養液には、それに漬かる肉塊が不気味に胎動している。肉塊 いや、その生物は窮屈そうに身体を屈めていて、如何なる姿をしているのか判別できない。

だがそれは頭部らしき部分から禍々しい紅い眼だけを虚ろに、その場にいる彼らに向けていた。

「……チツ、失敗作だな」

暗闇の中に三人の人影。

二人は白衣の姿で眼鏡をしている男と、砂色の髪の女。そしてもう一人は黒衣に身を包んだ男。

黒衣の男の表情は黒い布で覆われ読むことができない。しかしその呟く声は静かな暗い男の声だった。

「失敗？ でもこれは自らの実体を得ている 以前の消滅した組み合わせとは違うのですよ？」

女の問いに黒衣の男は答えなかった。

無言で装置に歩み寄り、据えられた操作盤を制御し硝子台を開く命令を打ち込む。すると硝子台の培養液が排出され、覆っている硝

子は台の中へ吸い込まれるようにして静かに収納された。

「だ、大丈夫なのでしょか？ あの液には精神鎮静と超強力麻酔の効果が含まれていて、液から解放すると目覚めてしまいます！」
眼鏡の男は動揺して後退りした。

しかし黒衣の男は自らその生物に近寄っていく。すると麻酔から目覚めた生物は、まだ動きの鈍い身体を持ち上げ彼らに対する威嚇のためか咆哮をあげながら身体を広げた。

「素晴らしい……」

女は陶醉したように感嘆の声も漏らす。

台の上に立ち上がったそれは、二対の巨大な猛禽類の翼を広げ、爬虫類の如く頑丈な鱗で身を覆っている。筋肉繊維の詰まった太い二本の腕を伸ばし、長く伸びた尾でバランスを取り二足で立ち上がっている。幾つもの角を構えるその頭部に紅い眼を爛々と輝かせ、生物の王の如く彼らを睥睨していた。

「フン、竜か……しかし我が理想には遠く及ばん。消え失せろ」

黒衣の男は衣の中から剣を抜き出した。

だが敵意を察した竜はすかさず尾を振り抜き黒衣を迎撃。凄まじい衝撃に剣が弾き飛ばされ壁に激突し甲高い音を立てた。

しかし黒衣は跳躍し新たに剣を抜き出している。竜の肩に着地し剣を頭部へと突き刺す。黒い鮮血に濡れながら、男は幾度も剣を突き刺し肉を抉った。その度に竜は痙攣し悲痛に叫ぶ。

「………うっ」

眼鏡の男は思わず目を背けてしまう。女のほうも目を伏せ直視することはできなかった。

「死ねッ、死ねッ、死ねッ死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね……」

黒い怨嗟の声は止まず、頭が潰れても男は竜の身体を切り刻み続けた。暫くしてその声が止むと、台の上には原型を留めていない赤黒い肉塊が転がっていた。

「しかし、これの処理にはまいるな。まだ死んでない」
血で黒くなつた刀身を払い、男は肉隗を蹴り上げた。

肉隗は痙攣するように震えているが、それは死後の筋肉組織の痙攣ではなかつた。細胞が異常増殖し破損した部分を補い、切断された神経なども意思があるかのように自力で繋がっていく。

「さ、再生しているんです……！！ この勢いだと数十分もすれば元通りですよ！」

「なら再生も不可能なように細胞ひとつ残らず焼却するしか……
……もしくは」

女の意見のほうに黒衣の男は興味を示した。

「破壊する意外の方法がある？」

「ええ、推論ですが……霊的狀態に還元し、物体に
例
えば剣などに定着させれば封じ込めることが可能かと」

しばし黒衣は黙考した。

その間にも肉隗は蠢き再生し、竜の肉体が元に戻りつつある。

「予定範囲外だが、実験を許可する」

「ありがとうございます」

二人のやり取りを眼鏡の男は一步下がって眺めていた。足元が震え今にも崩れ落ちてしまいそうだ。

「どうした？ 貴様の力も必要だ。協力しろ」

「は、はい！」

彼が恐怖していたのは竜ではなく、黒衣の男のほうであった。

第一章【拷問】

「《雷烙白撃ライヴン》！！」

正方形のやや圧迫感のある灰色の部屋。

その圧迫感の理由は装飾などが一切なく、窓には鉄格子がされ飛び出したりできないようになっており閉鎖的なのと、単純に部屋が入る人数のわりに狭く設計されているからだろう。

その部屋で突如虚空に発生した稲妻が男の背後に落ち激しく放電し弾けた。

「ヒイヒイヒイ!?」

男は椅子から飛び上がり転がり落ちた。そのまま這いずって逃げようとする。だが目の前に何者かの足が現れ塞がってしまった。

「どこにいくのかなあ、まだ取調べは終わってないよ?」

そう言いながら彼は自己精神の裡に潜入する。心の暗い闇の奥底に感じる涼気　その“存在”に向かい、呼びかける。

“我が水を守護する精霊よ　今こそ力を行使せよ”

現実世界の流れとは違い、自己精神の裡では全てが一瞬で終わる。
「《飛氷戯ルボク》！」

彼の“呼びかけ”により、存在から引きずり出された“力”は現実世界で発現する　虚空より生まれ出た人の頭ほどもある氷の塊が、男の鼻先をかすり眼前に鈍い音をたてて落下した。もう少しずれていれば鼻が削げてなくなっていたかもしれない。

「うあああ!?　くそおツ、鬼！　悪魔！　何が取り調べだ！　こんなの拷問だ！」

「ねえ、ザード。僕たちが悪魔だってさ」

「確かにそいつは聞き捨てならねえな、リック。俺達は我がアスラ

に住む市民を悪から守る、善良な“皇国精霊術士隊”なんだぜ？
この盗賊風情が」

男は半泣きで喚き散らしている。

ザードと呼ばれた青年はその男の背中を踏みつけ黙らせる。漆黒の髪を逆立たせ、同色の鋭い瞳を輝かせ不敵に冷笑を浮かべたその姿は確かに鬼か悪魔にも見えてしまう。

彼が言う皇国精霊術士隊とは通称、術士隊エレメンツと呼ばれ、世界最先進国の巨大皇国都市アスラ有する軍隊であり、また街の治安統治の役割も兼ねている国家組織でもある。

誰しもの心に宿っている精神精霊。

精霊術士はその精霊呼びかけ力を引き出し、術を行使する。それには五つの属性があり、火水木金土それぞれの精霊が確認されている。先ほどの場合は、金行属性の雷、水行属性の氷の術を精神精霊から引き出し発現させたのだ。

精霊術を行使できるようになるには個人差はあるが、才能に恵まれ幾年の鍛錬を積んだ者ならば術を引き出せるようになり、認定試験を受ければ精霊術士の資格を得る事ができる。

その中でも優れた術士ならば危険な任務もこなす術士隊に志願することもできるのだ。

「盗賊さん、素直に罪を認めなよ。そうすれば三割は優しくするから」

にっこりと微笑むリックと呼ばれた青年。

癖のある黄金色の髪を左右へ流し、青い瞳は分厚い眼鏡に覆われていて眼は笑っていないのが男には見えない。

「うあああ、くそお、オニ、アクマ、こんなのゴーモンだ……
と」

「ルナ、そこは書かなくていいから」

「えっ、そうですかあ？」

机に座り一人黙々と供述書を記していた少女。

清潔感ある良い薫りが染み込んだ桜色の髪は背中まで伸び、幼さ

の残るあどけない表情には琥珀の輝きを湛えた大きな瞳を乗せ無邪気に笑みを浮かべる。

「あのう盗賊さん、怪我したらルナの術で治してあげますから、心配しないでいっぱい怪我してくださいネ」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

男は無邪気に残酷なことを口にした少女に啞然とし、その眼差しに耐え切れなくなり観念した。

「あつしがやりました……」

「ちっ、なんだよ。もうゲロったぜ」

「前の人はもつと楽しませてくれたのにねえ。その人いま精神病院に入院してるんだっけ？」

ザードがさもつまらなそうに毒づき、リックも歎息した。

「神がいるのならこいつらに天罰を下してくれ……」

男は生涯で一番の信仰心で切に祈った。

「何かいったか？ えーっとそれじゃ、件の、会社の社長に変装して金を持ち出そうとした犯行　とりあえず窃盗罪で間違いないな。まあ結局はバレて未遂だったようだが……変装とは考えたな？」

「へ、へえ！ あつしは、百面相と呼ばれ変幻自在に姿を変え一〇億ゴールドという史上最高の総窃盗額を樹立した、伝説の怪盗ゼロに憧れてまして！」

「怪盗ゼロ……確かに、あの変装術は見事だったね。全く見破ることができなくて、何年も前　僕たちがまだ新人の頃、振り回されて苦労したよ」

「まあ結局は隊長が捕まえたんだけどな」

と、そこへ机の上にある内線電話が鳴り、ルナが笑顔で受話器を取った。

「はい　あつ、そうなんですか……はい　餃子とラーメンのセット一人前ですねえ」

と言いつつそれをメモするルナ。思わずリックは不安になる。

「ルナ、誰と話してるの……?」

「ロベルト四番隊長ですう」

「ああ? 注文をこっちにかけるのはおかしいだろーがあ!」

ザードは盗賊の男の首を取り逆向きに伸ばし怒りをぶつけた。

「いで、いでで! なんであつしがああ!」

その様子を無視し、リックはルナに向き直った。

「で、ルナ。本当は隊長何て言ってたの?」

「はい、隊長室に三人で来るように、ということですよ」

「そう……例の事件の件かな?」

それを耳にするとザードはすぐに立ち上がり、服の乱れを直した。

その顔には不適な笑みが張り付いている。

「くく、ようやくお呼びか……さて、拷問もとい取り調べ

も飽きたし行くぞ」

「はいですよ」

三人は盗賊を残し揃って部屋を後にした。

暫く茫然としてから忘れられた盗賊は内線電話の受話器を取った。

「あー、逮捕するんならしてもらえます?」

第二章【捜査】

写真は残酷だ　現実がとうにそれを追い越しても、その姿は何一つ変わらない。だがしかし、その刻を取り返すこともできない。今でも額縁の中の愛しき人は変わらぬ笑顔でこちらを見つめている　曇りのない瞳で。

「隊長つ、お呼びですか!？」

突然乱暴に扉が開け放たれ、思考を中断されたロベルトはうんざりしながら写真立てを伏せ、闖入者を睨みつけた。

「ザード、入室の際にはノックをしろ」

隊長格の術士は本部に各個人の事務室を用意される。そして五人の隊長の一人、ロベルトの隊長室へとザードたちは赴いた。

さすがは隊長格個人用とあり、無機質で無愛想なことでは有名な術士隊本部、その一室であるのを忘れてしまう。床には靴が沈み込みそうな絨毯が敷かれ、隊長格に相応しい高価な調度品が品良く置かれ高級ホテルの一室のように飾られていた。

「スンマセン、気が焦って、はは……」

ザードは調子良く誤魔化し笑いを浮かべた。

するとロベルトは人差し指をザードに向けた。その指先に小さな火球が発生している。

「焦燥故に死まで急くことなかるう？　灰になるか？」

「い、いえ！　滅相もない！」

ザードはあぶられたかのように全身に脂汗を浮かべた。

突きつけられた指先の火球が数倍に膨れ上がり自分を消し炭にしてしまうのではないかと、本気で恐怖する。ザードはこの隊長ならやりかねないと信じていた。

その様子にロベルトは取り合えず気を直したのか指をしまった。
焰の死神　ザードはその名を思い出した。

炎と爆裂を操る火行術士として、火力戦で最強を謳われたロベルト。

肩口には金の隊長格級の隊員勲章が光り、白髪を後ろに撫でつけ、皺混じりの銀の眼光はしかし古狼の如く鋭さを全く失ってははいない。彼は不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、おもむろに口を開いた。

「……諸君も知つてると思うが、例の『ソウルイーター』の捜査は難航している状況だ。現在はイリスとミランだけが担当しているが……被害者はもう四人目まで出ている」

豪華な室内が一気に重苦しい空気に包まれる。

ロベルトは言葉を切ると席を立ち、窓の外を眺めた。

人の営みは限りなく、眼下には彼方まで人の手が加えられた都市が広がっている　巨大皇国都市アスラ。

精霊術の応用科学の発達により小さな文明からたつた千年程で急激に発展を遂げた歴史をもつ。

現在、そのアスラの精霊術士たちを震え上がらせている『ソウルイーター』は、強力な力をもつ術士　精霊術士隊だけを狙いその精神精霊を消滅させる事件を起こし続けている。

その犯行からどこかのゴシップ記事が勝手に、魂を喰らう怪物

『ソウルイーター』と名付けたが現場には確かな痕跡や目撃証言もないためその正体は全て謎に包まれていた。

「精霊を消滅させるなんて……きつと相当な木行術の使い手ですね。僕ら『呼応』段階よりさらに上の『視認』、いや『接触』段階まで覚醒しているかもしれないね……」
リックは眼鏡にロベルトの後ろ姿を映しながら口にした。

術士の力量は、精霊に対する干涉力によって大まかに判断できる。

『無感』、『気配』、『呼応』、『視認』、『接触』という五つの干涉段階が現在確認されており、精神の奥底に眠る精霊により近づくことができる段階ほど術が強力になってくる。因みにロベルト

の場合『接触』段階まで達しており、その気になれば個人で街の一区を焦土と化せてしまつたろう。

また、木行属性は樹木や草木を司り、応用によって肉体の回復や、唯一精神への干渉も可能となる、五つある中でもっとも制御の難しい高度な属性である。

「ルナはそんなことできないですう」

『呼応』段階の木行術士であるルナは外傷の治療術や軽微の精神干渉まで行えるが、精霊を抽出したり消滅させるほどの超高度な術は不可能なのである。

この広いアスラでも個人でそこまでできる術士は数えるほどしかおらず、すでに行われた捜査では彼らには自然なアリバイがあり、動機も存在しなかった。

「……これ以上同胞の犠牲者を増やすわけにはいかん。お前たちにも捜査に加わつてもらつう。特に同期であるお前なら連携もうまくいくはずだ。協力して捜査しろ。わかつたな？」

「任せてください！ ザードとは切つても切れない、捨てても犬も食わない腐れ縁ですから」

「そうですね、歩けば棒に当たるですう」

「それちよつと違つぞ……」

隊長の命令に逆らえるはずもなく、ザードたちは一様に頷いた。隊長室を後にして、ザードは急に吹きだした。

「くくつ、ようやく隊長の許可が下りたぜ」

「ど、どうしたのさ？ やけに嬉しそうじゃない」

「……捜査の増員は俺が訴えてたんだ。これ以上、仲間がやられているのを見過ごせない」

いつになくザードは真剣な顔つきをしていた。その思いの裏に、一人の少女の影があるのをリックは知っていた。

それに感化されたのかルナも使命感を露わにする。

「うん、必ず犯人を捕まえるです」

犠牲になつた術士たちは隊の同僚であり、彼らもよく知っている

者たちだった。次は自分たちかもしれない。それでも仲間の無念を晴らしてやれるのは自分たちしかない。

だが、リックは珍しく思い詰めたように呟いた。

「ロベルト隊長……まだ引きずってるのかな？」

「あ？……ああ、亡くなった奥さんのことか？ 大丈夫だ。もう一年も経つんだぜ。さっきだっていつも通りだったじゃないか、本気で殺されるかと思っただぜ」

「……うん」

リックはロベルトが写真立てを伏せたのに気付いていた。その縁の中には妻セシルの写真が収まっているはずだ。

リックはその女性を知っていた。街で偶然、ロベルトと一緒にいるところを見ただけだが……。笑顔の眩しいとても綺麗な女性だった。そしてその時にはお腹に子供が宿っていた……。

「よぉ〜し、先に外に出た人が勝ちだよっ!？」

「あ、待つてよ〜!」

廊下に出た途端、ルナがいきなり走り出したのでリックの思考は中断された。二人が走り去りザードは一人残された。

「おい、連携とか協力とかどこいった……。……」

ザードは早くも先行きに不安を感じていた。

第三章【発覚】

「僕は皇国精霊術士隊の者です。ここであった殺人事件の捜査をしているのですが……」

四人目の事件現場となったのは、繁華街の裏にある人気のない通りだった。午後を回る今でも人並みは疎らで、死亡推定時刻から計算して犯行は夜にあつたらしい。目撃証言を得るのは難しいだろう。リックは術士隊の証明となる隊員勲章を見せた。

勲章は精霊の五行属性の象徴となる炎や水、樹木と稲妻、岩石を組み合わせた紋様を刻印した銀貨で、その繊細で巧みな細工を複製することは電子と共に金属を操る金行術でも至難を極める。

「ああ、あの『ソウルイーター』の事件？ でも、何も知らないわ。力になれなくてごめんなさいね」

興味深そうに勲章を確認してから、金髪の美女は言った。

派手な化粧と露出の多い出で立ちは夜の仕事の匂いがする。リックは証言を得られないと分かるとすぐ勲章をしまい、代わりに一本の薔薇を差し出す。

「では僕と結婚しましょう。僕の力になってください！」

「リック……なにしてるんだ、おのれは？」

「結婚しちゃうんですかあ？」

「げっ、ガード！ ルナ！」

単独行動をしていたリックの背後にいつの間にかガードとルナが立っていた。その隙に美女はさっさと香水の香りを残し去ってしまった。

リックはそれに気づき、その場に崩れ落ちてしまう。

「ああっ、最後の恋を逃した………終わった………」

「何回目の最後の恋なんだよ、ったく」

リックの軟派癖は今に始ったことではなかった。

彼は術士としての腕は良いのだが、女にはやたら弱いのだ。

「そ、それはそうとザードたちのほうは何か掴めた？」

「ぜんぜんだめですう。それにイリスちゃんとミランくんとも連絡がとれないんですう」

その時、ザードの携帯通信器が鳴った。

アスラの科学製品工場で金属部品の生成を得意とする金行術士たちによって生産されている、手の平に収まる通信端末だ。電波を飛ばし各通信器と会話を繋ぐことができる。

「こちら、ザード………なにつ、すぐ行く！」

通信を切ったザードは途端に走り出した。

慌てて二人も後を追う。

自然公園の裏手にある雑木林。

そこで彼女は眠っていた いや、眠るように死んでいた。

「被害者は皇国精霊術士隊『視認』段階覚醒金行術士、イリス・キヤラウェイ………死因は精霊喪失性不全 精霊を失ったことによる死亡、今回もまた『ソウルイーター』の手口と思われます」
紺色の制服を着た鑑識官は淡々と告げた。

通報を受けた術士隊は数名の鑑識官を派遣し、既に現場検証が行われていた。そして捜査を担当しているザードにも連絡が入ったのだ。

「イリスが………どうして」

「ひどいです………」

リックは愕然と立ち尽くしていた。ルナも言葉を失っている。

「第一発見者は若者で、今日の午後、公園で放した飼犬が雑木林に飛び込み、被害者の遺体の前で吠えているのを見つけ通報したようです」

鑑識官の報告を聞きながらザードは白い手袋を嵌め、既に冷たく

なったイリスの身体に外傷がないかを手にとって調べた。

彼女の着衣や砂色の髪の毛の乱れは少なく、元々白かった肌は蠟人形のように白くなってしまっていた。だが遺体の状態は良く、本当に眠っているだけかのようにも思えてしまう。

「……外傷はないな」

「はい、精霊だけが消滅しており、今までの『ソウルイーター』の仕業だと思われる被害者の身体には目立った外傷がありません。強いて言えば 被害者には共通して首筋に小さな傷口があるだけです」

鑑識官に促されザードはイリスの首筋を調べた。

すると首筋に小さな、三角形の三辺に穿たれた、丸い穴のような傷口があるのに気付く。

「これが致命傷になるわけもない……なんなんだこれは？」

外傷がないということは抵抗する間もなくやられたのか しかし精霊を『視認』できるイリスほどの術士が無抵抗など考えにくい。

「ザード、一度本部に戻ろう。ミランが戻っているかもしれない。

それに、僕たちだけでこの事件を解決できるとは思えないんだ……」

自分たちでは太刀打ちできないような相手を追っている。相当な術の使い手であったイリスの死によってリックはそれを理解したのだ。

「そうだな、口惜しいが認めるしかない……隊長に捜査員の増員を要請しよう」

三人は黙祷し、同僚の死に冥福を祈る。

精霊を失った人間の魂はどうなるのか 天の異界へと旅立つのか、或いは消えてなくなってしまうのか。ザードは胸の裡で思い巡らす。

すると突風が吹き抜け枝木に留まっていた黒い鴉が耳障りな鳴き声を残して飛び去り、木々が眠れる美女を哀れむように囁きざわめき立てていた。

数十分後 ザードたちは本部に帰還した。

だが、希望も虚しくミランは戻っていなかった。

「うむ………わかった」

イリスの訃報にロベルトは静かに頷くだけだったが、その顔には濃い疲労の色が浮かんでいた。こうなると恐らくミランも その言葉を飲み込み、三人は捜査員の増員を要請し足取り重く退室した。「ただでさえ術士隊は人手不足だったのに………」

人口十万人を越すアスラに対して本部と都市の各区の支部を含め、術士隊の事件捜査員として実際に動ける隊員は僅か千人にも満たない。その各自が各々事件を担当しているので、捜査員の増員は難しくなる。

術士はあらゆる分野で重宝され、わざわざ過酷な勤務の術士隊に志願する者が少ないというのが現実だ。

思わず口にしたザードの発言にリックが不快な表情を浮かべる。

「ザード、それは殺された僕らの仲間に対して失礼じゃないかな」

「いや、つい………そんなつもりじゃねーよ………大体、そう言うお前だって真面目に仕事しろよ。やる気あんのか？犠牲者をこれ以上出すわけにはいかないだろ!？」

「あ、あうう、二人ともやめてくださいですう」

ザードとリックは静かに睨み合い、二人の間に一触即発の不穏な空気が漂い始めた。ルナも動揺し今にも泣き出しそうな顔になっている。

「フン、そう感情的になるのは昔から変わらないね。キミがそんな

だからソフィアだって

「てめえ、リック!!」

ついにリックの言葉が逆鱗に触れ、ザードがリックの胸倉を掴み殴ろうと拳を固めた。ルナは見ていられず両手で目を覆う。

「一体ッ、どう言うことじゃッ!!」

突如、物理的な振動さえ感じそうなほどの大罵声が響いた。

ザードの手も思わず静止し、それは三人がいるホールの受付の前で杖を片手に立っている禿頭の老人から発せられたものだった。

「で、ですから、本件は受理致しますが捜査員の不足により後にこちらから捜査員を手配しますので、最低一週間ほど待つて頂くことに………」

「じゃからッ！ 一週間も待つてられんと言つてるじゃろッ！ 今すぐに捜査をするんじゃ！！ ワシを誰だと思つておる！？」

老人の凄まじい剣幕に受付の娘も気圧されてしまい、それ以上口にする事ができなくなる。

ザードは一度歎息するとリックから手を放し、老人に歩み寄る。

「コラコラ、じーさん、そんなでかい声出したつて無理なものは無理なんだよ。一週間も待つてば逃げた猫の搜索でも何でもしてやるから今日は家に帰りなつて」

「うぬぬうゝ、なんだ貴様は！ 無礼者め、猫なんぞ飼つておらんぞ！ ワシは研究室から盗まれた医療装置の搜索を依頼しておるのだ！ そんじよそこの猫や物とは違つぞ、その価値はなんと一億ゴールド以上に値する特別な物なんじゃッ！！」

「い、一億う？」

その数値にザードは目を剥いた。

一億ゴールドもあれば死ぬまで豪遊できる。ザードやリックたちの一生分の給料でも足りない金額だった。

「それつて一体、何なんですか？」

興味を示したリックの問いに、老人は機嫌を良くしたのか怒鳴り声が若干柔らかくなる。

「うむ！ よくぞ聞いた若者よ。それは我が研究グループが多くの術士の総力と資金と心血とあと何たらを注ぎ込んだ最新のミラクル医療装置なのじゃ！ 従来では強力な木行術士の精霊術だけでしか不可能だった精霊の抽出もただ強力な精霊力を注ぐだけで可能！

これで緊急を要する急変種悪性精霊や恒常性壊死精霊などの抽出もはかどり今まで救えなかつた患者の多くを救えるのじゃ！」

「へ、へえ、よくわからないけど、すごいですね……」
老人は一気に捲くし立て顔を真っ赤にしていた。その迫力にリックも気が抜けたように返事するだけだ。

しかしルナはそれを聞くと急に飛び跳ねた。

「ザードくん！ リックくん！ それっ、それですう！」

「あ？ ルナ、天然女特有の発作か？ 落ち着けて」

飛び跳ね回るルナを抑えようとザードは彼女を追いまわす。

しかしリックは一人、眼鏡の奥で思惟を巡らしていた。そして思い立ったように口を開く。

「待てよ、そうか……あの、おじいさん、その捜査僕らに任せて頂けますか？ その装置のことを教えてください！」

「おお、わかってくれたか若者よ！ ならばワシの研究室のある病院まで来るのじゃ！ 一刻も早くあれを取り返してもらわんと困るんじゃ！」

意気揚々と杖をつき、老人とリックは本部を出て行った。

やっとルナを捕まえたザードは首を傾げ呟く。

「……どういうこと？」

揶揄するようにルナが微笑みを浮かべた。

「ザードくん、ホントにぶいですう」

「ぐっ……」

いまだに理解していないザードにルナが止めを刺した。

第四章【断罪】

深い暗闇　無音。

近づいてくる音、気配がないか、彼は最大限に注意を払っていた。

「ここなら、見つからない……ここから動かなければ……」

「……奴はきつと、僕を狙ってくる……」

彼は身震いを抑えることができなかった。

暗闇の中に目を凝らすとあの男が立っているのではないかと思えてしまう。しかし目を閉じても同じことだ。

「くそっ……!!」

髪を掻き乱し脳裏から恐怖を追い出そうとする。

すると床に何かが落ちる音がして彼は叫びだす寸前で留まり、心臓が止まりそうになった。いや、それが自分のかけていた眼鏡だったと気付くまで、本当に心臓が停止していた。

「　　はあっ、はあっ、はあっ……でも、僕が行かなければ……誰かが……でも」

彼の自問自答は闇の深淵まで吸い込まれていった。

白く無機質な壁。

独特の、肺が拒絶するようなむせ返る匂い。

病院に漂う薬品臭に耐え切れずザードは顔をしかめた。

「好きじゃねーんだよなあ、病院って」

三人は老人に連れられアスラの中心区にある、皇立精霊医学病院へと赴いていた。

最新の医療技術はここで生まれる　その言葉に相応しく都心の中にありながら広大な土地に構えた城塞の如き白亜の塔。その最奥

にある嚴重な警備を何度も抜けた先の最新の設備を揃えた研究室から問題の装置は強奪された。

「すごいな……見た事もない設備ばかりだ」

リックは感嘆し言葉を漏らす。

老人が案内したのは、医療装置開発研究室。白塗りの壁とは対照的に試作段階の歪な黒い装置や器具がそこかしこの台などに置かれ、チエスの盤面に無雑作に散りばめた駒のようにも見える。

「これすべてがワシのものなんじゃッ！ なかでもあの装置が一番の期待と金と時間と何たらをかけて作ったものなんじゃッ」

「ぜんぶおじいちゃんのなんですかあ？」

ルナの問いに、老人は軽く咳払いをした。

「いかにもッ。それとワシは“おじいちゃん”ではない。ワシの名はガブリエル・ヘブンズドアツ！ この医院の全権限をもつ最高責任者、ガブリエル医院長なのじゃッ！！」

「な、このハゲ……いや、じーさんがこの病院のボスだっていうのか！？」

「わあ、すごいですう」

「そうですか」

ザードは大仰に驚いて見せたが、リックの反応は冷ややかだった。彼は興味がない対象に対しては冷たい。

「ザード、そんな大げさに驚くこともないでしょ。なんとなく予想できたことだし」

「あ、ああ……」

思わずザードも口籠もってしまう。だが当のガブリエルは気にしていないようだった。

「で、ガブリエルさん、例の装置は……」

リックが言いかけると、ガブリエルは焼きつくような蛍光灯の光を禿頭で照り返しながら言った。

「うむ！ 若者よ、装置にはミラクルな素晴らしい名称をつけておる！ その名もグレート・ハイパー・デストロイバスターじゃッ！

！ 略して“零式”と呼ぶッ」

「……どう略したらその破壊兵器みたいな名前が“零式”になるんだ？」

ザードの問いにガブリエルは答えなかった。

代わりに台に乗せてあつた黒塗りの装置を取った。それは注射器のような形状をしているが、針が三本も伸びている。

「これは零式のモデルじゃッ！ 本来の機能はないが、形状はそのままなのじゃッ。ほれ、この三本の針を被験者の首筋に刺し、零式の“精霊回路”に強力な精霊力を送り込む。すると回路の働きにより被験者の精霊へ直接干渉し強制摘出する……うむ、お前さんたちに分かるように破壊的に説明するとこんなもんじゃなッ！」

精霊回路とは機械を動かす制御装置である。

それは“精霊合金”を生み出す金行術士と、霊的なエネルギーである“精霊波動”を投射できる木行術士との合成術により創造される。

精霊合金は木術士の術による精霊波動を定着させること可能であり、この、術士の意思が込められた精霊波動が機械の命令などを制御するのだ。

「ルナわかりましたあ」

「……全然わからないんだが」

「ま、まあそれは良いとして……ザード、この三本の針って」

リックが指し示したのはやはり零式の先にある針だった。三角形の三辺に一点ずつ針が伸びている。

「ああ、大きさも間違いない。『ソウルイーター』はこの零式を盗み出したんだ。これで犯人が木行術士には限られなくなる。そして零式を盗み出したのが『ソウルイーター』だ！」

イリスや他の犠牲者にも必ずあつた首筋の傷。それは零式によるものだったのだ。零式によって精霊を摘出したのだとさすがのザードにも察しがつく。

「うむ？ そろるいーたーとは何じゃ。そんなものより早く犯人を見つけて零式を取り返してくれッ！」

「わかったわかった、言われなくてもそうするって」

「そうですよ」

「もちろんですうっ」

「………何じゃ？」

ガブリエルだけが理解できず、三人は笑った。

「見てください。これが監視記録の映像です」

白衣の若者は台に乗った映像装置を指差した。彼はガブリエルの助手であり医院の医師ジェミニク。痩せ細った神経質そうな男だ。

ザードたちは、ガブリエルとジェミニクと共に院内の会議室を使って監視記録装置の映像を確認することになった。

「なんだ、記録に映っているなら犯人がすぐわかるぜ」

「うん、指名手配してすぐ逮捕できるね」

「でも映りが悪いですう」

映像を回すと、白い廊下を進む人影が映っている。しかし映像が粗く、顔がよく見えない。

犯人は一直線に例の医療装置開発室へと向かっているようだ。

「すごいな………まるでスパイ映画でも見てるみたいだぜ」

ザードの言葉通り、犯人はただ者ではなかった。どんな特殊な施設も針金一本で素早く解除し、警備員が交代する隙を巧みに突いてどんだん侵入していく。

「ぬ、開発室に着きおったなッ！」

映像が開発室内に変わり、目的の零式を探している犯人が映る。すると部屋の一番奥に置かれていた零式を犯人が手にとった。

『よし、これだな。はっはっは、案外簡単だったなあ。警備が甘い

ぜ』

「………!？」

「ほえっ？」

「な、なんじゃと!!」

映像の正面に犯人が映り込み鮮明にその顔がよく見えた。

しかしその顔を見た途端、その場にいた全員が目を疑った。映像の中で零式を持ち高笑いを浮かべているのは顔も声も紛れもなく、リックだったのだ。しかし当のリックは何故かわかっていないらしい。

「こいつがああ、『ソウルイーター』か! でも思ってたより弱そうだね、ザード……って、あれ? みんなどうしたの?」

「どうしたの? じゃないわいッ! 貴様あゝ、今まで演技しottaんじゃなッ!」

「リックくんが……犯人だったんですか……?」
「え?」

ルナの言葉にリックはもう一度映像を確認した。

そしてやつとそれが自分の姿だと気づく。眼鏡を拭きなおしたり目薬を点したりするがやはり結果は変わらない。

「そんな馬鹿な。ち、違う! 僕じゃない、僕がこんなことするわけないじゃないか!? ねえ、ザード!」

しかしザードは押し黙った。

旧友としてリックを信用しているザードだが、映像には紛れもなくリックが映っている。旧友だからこそ、それが本当にリックの姿だとわかってしまう。ザードは肯定も否定もできなかった。

「ええい、往生際の悪い奴めッ! ジェミニク、あれをやるッ、《岩彫神口アゴ》ッ!!」

「は、はい、医院長! 《霊光フラ》!」
ガブリエルが発動した土行術により、虚空から岩の塊が降ってくる。

それは天井まで届くほど巨大な人型をしていた。すかさずジェミニクの投射した木行術による精霊波動が岩に定着し命令が吹き込まれる。

「な、なんだこりゃあ」

「行け、岩人形ストーン・ゴーレムよ！ 不屈きな小僧を懲らしめるのじゃッッ！！」

岩人形は精霊波動によって擬似生命を得て命令に従い動き出す。

岩は精霊合金ではないため一時的にしか精霊波動を定着できないが、数分間は役割を果たす。リックを狙い会議室のテーブルを踏み潰しながら猛突進した。

「ええ！？ ちょ、ちよつと待つて！」

思いのほか動きの速い岩人形はリックに向かって巨大な拳を振り下ろした。リックは横手に転がり攻撃をなんとか回避。岩人形の固く重い拳はリックの背後にあつた映像装置を台ごと粉々に潰した。

「ま、まさか本気で殺す気？」

腰が抜けたのかリックは立ち上がれない。

岩人形は冷徹に彼を見下し、動けないリックを踏み潰そうとした。

「る、《氷盾創装ルアミス》！」

間一髪、リックは術で創造した氷の盾を掲げ岩人形の攻撃を防いだ。だがあまりの重さに氷の盾にひびが入り、砕け散ってしまう。

「うわぁッ！？」

「リック！ くそつ、《雷烙白撃ライヴン》！！！」

ザードは精霊に呼びかける。

暗い闇の底に感じる肌が痺れるような気配　ザードの金行属性の精霊は呼びかけに応えその力を現実世界へと行使した。

突如、虚空より発生した雷が岩人形の身体を激しく打ちつけた。

轟音と衝撃が岩人形を貫くが、しかし動きに変化はなかった。再びリックに拳を向ける。

「岩人形はそんな電撃では倒せんぞッ！ ガッハッハ」

ガブリエルは勝ち誇り愉快そうに哄笑した。

「ちくしょう、ならっ！」

ザードは両手を天に掲げた。

「《剛剣創装ブレミス》！！！」

電子を操り金属を創造する金行術。

ザードの掲げた両手に一瞬にして金属の大剣が創造され、間髪入れず岩人形に向かって疾駆した。だが、岩人形はリックを狙いすでに拳を放っている。間に合わない。

「《鳶絡捕バハリ》っ！」

刹那、ルナが術を発動し虚空から伸びた鳶が岩人形を何重にも縛り付け動きを拘束した。

「うらああああ!!！」

その隙を突いて、突進した勢いを加えたまま大剣を岩人形の胴へ叩き込む。ザードの剣は頑強な岩肌をも切り裂き、岩人形は真っ二つにされ崩れ落ちた。

「むッ! やりおるなッ! うぬ、もう一度じゃジェミニク!

《岩彫神ロアゴ》ッ!!！」

「はい、医院長! 《霊光フラ》!」

ガブリエルとジェミニクは再び岩人形を生み出した。今度はザードに向かって腕を振り上げ突進してくる。

「ええい、皆殺しじゃああああ!!！」

「やめんか! クソジジイ!」

怒り狂ったガブリエルは聞く耳をもたず、岩人形とザードたちの攻防は通報を受けた術士隊が駆けつけるまで続けられた……。

第五章【接触】

「裂帛の白は果ての罰。心臓を引き抜いて祭壇に捧げ祈ろう。

私と彼の罪が赦されるように 砂礫の廻廊は静寂に包まれ眠る」
彼は静かにそう呟いた。

偉人の詩集を片手に、彼は杯に注がれている紅い蒸留酒を味わう。
品良く高価な調度品に囲まれた部屋で彼は優雅な一時を過ごして
いた。

だが突然、その安らぎの時間を破壊する鐘の音をした呼び鈴が鳴
り響き、彼は詩集を置いて杯だけを片手に電話の受話器をとった。

「 嗚呼、容赦なく破壊の鐘を鳴らすのは、深き深淵に漂う貴君
だろうか」

『あ？ 何言ってるんだ、怪盗ゼロ』

受話器の向こうからはザードの声。

彼 怪盗ゼロが收容されている特別重要收容所に赴いたザード
は廊下の“独房”の扉の脇に据えられた、中の收容者と会話を繋ぐ
電話を使っていた。

「ふふっ、いや・・・暇を持って余し詩集などを詠んでいたも
のだから感化されてしまったようだね。その声は 確か私を捕ま
えようと奔走していた精霊術士隊のザード君では？ 出世はでき
たかい？」

『余計なお世話だ。数年ぶりだな・・・相変わらず、俺の部
屋なんかより数倍は家賃の高そうな部屋で優雅に過ごしているみた
いだな』

ゼロはザードの言葉に、部屋を一瞥した。

受刑者が收容されている部屋としては余りにも豪華な造り。窓が

ないことを除けば一流ホテルに匹敵するほどの景観である。

この特別収容所は、一般の収容施設に入れることのできない高い地位にある大物政治家や、より警戒を必要とする受刑者のために建設された。

豪華な部屋のそこかしこに設置された監視記録装置によって絶えず遠隔映像監視されている。凄腕の軽業師でもあるゼロは一般の収容所では脱走の可能性もあり、ここへと移されたのだ。

「お陰様でね……して、君は何故ここに？ まさか私の声が聞きたかったからというわけでもあるまいな？」

「……わかつてるんだろう。リックに完全変装し病院から装置を盗んだのはお前だな？ ゼロ」

ザードの言葉にゼロは沈黙した。

「リックが事件の容疑者として逮捕された。例の装置自体は発見されていないが……このままだとリックが犯人として裁かれるのも時間の問題なんだ。だが俺は、あの間抜けなリックがまさか犯人だとは到底思えない。あそこまで完璧な変装ができて潜入のプロといったら ゼロ、お前しか考えられないんだ」

ザードの追求に、ゼロは杯を傾ける。

「残念だが 私ではないよ。私はずっとここで捕らわれの身になっていたのだからね」

「……だが、装置が盗まれたその日、お前は変装窃盗事件の参考人としてある人物に連れ出されていたな？」

ゼロは疲れたように歎息した。

浮世人を気取る彼にしては珍しいことだった。

「ザード君……命が惜しいならもうこの事件に関わってはいけない」

その言葉にはかすかに、脅えのような感情が含まれていた。すると突然、ザードは通話を切った。

これ以上追求する必要がなくなったからだろう ゼロはそう解釈し受話器を置いた。

代わりに詩集を拾い詠みあげる。

「私は唯一、神を呪う。我々に焔と叡智を授け、茫漠たる自由を赦されることを。」

差し伸べし手は灰塵に帰し、魂が歪み砕け散っても、両翼の掬いなど針の先ほどにもない。

「されど流るる河は悠久に止まらぬのだ」

ゼロは酒を一気に飲み下した。

空になった杯をもつその手はかすかに震えていた。

病院を出ると、月が輝く夜になっていた。

「遅くなっちゃったですう」

ルナは事件の調査のため、零式が盗まれた精霊学病院を訪れていた。

リックが盗み出した犯人である証拠を集めるためだ。逆に証拠がなければ、リックが犯人である可能性も少なくなる。だが……

「結局……何も見つからなかったですう……」

ルナは肩を落とし、一度本部に戻ることにした。心当たりがあると言って別行動をしているザードも戻っているかも知れない。

と その時、頭上の月を何かが一瞬遮った。

「？」

それに気付きルナは頭上を見上げるが、特に変化はない。

夜になると住宅街である辺りには人氣がなく不気味に感じる。

「！ わわっ」

突如彼女の携帯通信器が鳴り響き、驚いたルナは慌てて通信器を落としてしまう。拾おうと手を伸ばすと、黒い革靴がそれを踏み潰す。

「……ッ！」

ルナは殺気を感じ咄嗟に飛び退く。

すると黒衣の男が彼女の首筋があった空間に何かを打ち込もうと

した。

「ほう……反応が良いな」

黒い布で顔を覆った男は、くぐもった声で呟いた。

男がその手に持っているのは病院で見たモデルと同じ 零式だ
った。

「 本当の犯人はあなたですねっ」

ルナは距離をとって戦闘体勢に入った。

彼女は戦闘が得意な術士ではないが、逃げようとはしなかった。

ここでこの犯人を捕まえればリックを救うことができる、その思い
がそうさせた。

「戦うつもりか？ お前は木術士。戦闘タイプの術士ではな」

「《襲枝舞バリダ》！」

男が油断している隙にルナは術を行使した。

ルナの周囲の空間から伸びた鋭い枝の群れが黒衣に向かって迫る。

「くっ！」

腕や脚の皮膚が抉り取られ鮮血が飛ぶ。

隙を突かれた黒衣は身をよじって致命傷を避けることしかできな
かった。

「《眠胞子スクド》！」

間髪入れず連続で術を行使する。

誘眠作用のある光り輝く胞子がルナの正面で発生し黒衣へと飛ぶ。
しかし男は身を屈め空高く跳躍していた。

「!？」

ルナの背後に降り立った男は零式の針をルナの首筋に押し当てる。

「てこずらせる……これで終わりだ」

黒衣は零式を持つ手に力を込めた。

刹那、黒衣の背後から伸びた蔦が零式を絡め取りその手から奪い
取った。蔦はそのまま伸びた方向へと戻っていった。

「今だ！ 逃げて！」

声に導かれるまま、ルナは黒衣を突き飛ばし距離をとった。

振り返ると黒衣の背後には眼鏡をかけた青年が立っていた。戻した蔦から零式を取り上げている。

「ミランくんっ!」

青年はこの数日間失踪していた精霊術士隊のミランだった。

ミランはルナに頷き、油断なく黒衣を見据えている。黒衣もミランのほうへゆっくりと向き直る。

「フン、貴様……自分から身を隠して、自分から現れたか。ちよつどいい。まとめて処理してやる」

「もう、僕は逃げない。もう貴方の好きにはさせない!」

「ミランくん……?」

黒衣は衣の中へと手を入れる。

すると抜き出した剣をミランめがけてそのまま投げつけた。

「く!? 《蔦絡捕バハリ》ッ!」

ミランの周囲の虚空から伸びた蔦が剣を絡めて受け止めた。

しかし黒衣はその隙に素早くミランへと忍び寄っていた。ミランの腕を掴み取り、彼が手にしている零式を首筋に突き刺す。

「が、がああああああ……ッ!」

眼を剥き絶叫するミラン。

その凄まじい断末魔の悲鳴は、最後には声にならなくなっていた。零式によって精霊を抽出されたミランは力尽きその場に崩れ落ちた。

「ミランくん!?!」

「くくく……これですべての属性がそろった。もうお前にも用はない」

黒衣はルナに背を向け立ち去ろうとする。

しかしその行く手を阻むかのように立ち尽くしているのは ザードだった。

通信器を通じないことにルナの身を案じたザードは病院まで駆けつけたのだ。

「ルナ、大丈夫か! そこに倒れてるのは……ミラン!?
ちくしょう……てめえ!」

ザードは構えを取り黒衣を鋭い眼光で睨みつけた。

しかし黒衣は意に介さず悠長に歩き出す。

「やれやれ、今夜は邪魔が入ってばかりだな……死にたくなければ、どけ」

「《剛剣創装ブレミス》ッ！ うおおお！」

光が集約し、ザードの掲げた手の中に剣が創造される。

鋼鉄の剣を振りかざしザードは黒衣へと突進した。対して黒衣は武器を出す素振りも見せずそのままザードと相對する。そして間合いを詰めたザードは渾身の力を込めた一撃を繰り出す。

「《灼手バハ》」

「！」

空気を切り裂き唸り迫る刃を、黒衣は素手で受け止めた。

黒衣が行使した火行術により灼熱の炎を纏った手は、鋼鉄の刃を一瞬にして融解させてしまふ。そして黒衣は回転し、無防備なザードの胴に強烈な回し蹴りを叩き込む。

「がはッ……！」

その勢いに吹き飛ばされザードは民家の壁に激突。

さらに、黒衣は容赦なくザードの顔面を掴み壁に何度も打ち付けた。壁がどす黒く血塗れになる頃、ようやく黒衣はザードを解放した。しかしザードは力なく崩れ落ちる。

「くくく……もはや誰も止めることはできん。フハハハハハ！」

黒衣は哄笑をあげながら、闇の中へ消え去った。

ルナは去った黒衣には構わず急いでザードへと駆け寄る。

「ザードくんっ！ ザードくんっ！」

呼びかけてもザードは反応しない。明らかに致命傷を負い意識を失っていた。

“我が木を守護する精霊よ 今こそ力を見せたまえ”

ルナは精神の裡で深き闇に眠る安らかな気配へと必死に呼びかけた。精霊はルナの呼びかけに応え術を現実世界へと行使する。

「《精成光ハロウ》」

月明かりのような柔らかな光がルナの手の平に生まれる。

その光はルナの精神のエネルギーを、木行属性の精霊を介して生命力へと変換したものだ。光はザードの体内へと注ぎ込まれ人体に元々ある再生力を増進させる。

「お願いですう……死なないでくださいです！」

ルナの瞳から溢れた涙が頬を伝いザードの瞼に落ちた。

ザードの外傷と失われた血液は再生されていくが、呼吸と心拍は静かに止まりかけていた。

第六章【覚醒】

“ここはどこだ”

暗闇の中、彼は呟いた。

何も見えず、何も聴こえない。地に足が着いている感覚がなく、不安定な浮遊感に包まれている。彼はそんな状況に畏怖した。だが、それ以上に恐ろしいことに気付く。

“俺は……誰だ……思い出せない……”

自分が何者なのかさえわからない。

意識していなければ自我さえ消滅してしまいそうな気がした。

『ザード！』

突然女の叫び声が背後で反響し、彼は驚いて振り向いた。

すると、見た事もない少女が暗闇に浮かび彼に助けを求めるかのように手を伸ばしていた。

“俺は……ザードっていうのか……？ お前は誰だ……どうすれば救える？”

彼の問いに少女は答えず、哀しげな表情を浮かべた。

その表情に彼は困惑する。

“何故そんな顔をする？ どうして……”

少女は暗闇に溶けるようにして消えた。

その瞬間、大事なものを失ったような気がして彼は焦燥に捕らわれた。

“なんなんだ……どうすればいい……！”

『彼女を助けることはもうできない。お前は救えなかったんだ』
暗闇の中に響いた声に、彼は周囲を見回した。

しかしその声の主を見つけ出すことはできない。肌が痺れるような気配だけが闇の奥から感じられた。

“ どういうことだ!? 隠れてないで出て来い!”

『 残念だが………まだお前は私の元へ来ることはできない。』

それどころか、お前の存在はこのまま消滅しようとしている『

“ !?”

彼はその事実には恐怖した。

自分の姿さえ見えない暗闇の中に、その存在さえ消えていく感覚が確かにあったからだ。

“ どうすれば助かるんだ………”

『 思い出すのだ。自分が何者であったのか。もう一度だけ見せてやる。お前の記憶に一番強く残っていたその姿を 』

気配が消え、代わりに先ほどの少女が浮かんだ。

『 ザード! 』

また同じように、救いを求めるかのように彼に手を伸ばす少女。

見知らぬ少女 いや、彼は少女を知っている。

“ ……ソフィア………? ソフィア 姉さん………”

少女は哀しげ表情を浮かべた。

しかし今度こそ彼はしっかりと見た。それは哀しげな表情ではない 優しく微笑んでいるのだ。

彼女が何かを呟いた。

その瞬間、闇が強烈な光に包まれた。

「ソフィア………」

ザードはゆっくりと意識を取り戻した。

しかし視界が眩しく彼は眼を細める。

「ザード!」

「ザードくんっ!」

聞き覚えのある声 視界が光に慣れてくると、リックとルナが

ザードの顔を覗き込んでいるのがわかった。

「……なんだよ。ここは？」

重い身体をなんとか持ち上げると、彼は寝台の上に寝かされていたのだと気付く。

そして清潔感のある白い壁やむせ返る薬品の匂い　その様子から病院の病室だと理解した。

「そうか、俺はあの後やられて　そうだ！　ヤツを止めないと！　……おわっ!？」

ザードは黒衣のことを思い出し寝台から飛び上がった。

しかし身体がうまく言うことを聞かず倒れてしまう。

「無理しちゃだめだよ、ザード。まだ病み上がりなんだから」

「一晩中生死の境を彷徨っていたんですう、本当に心配だったんですようっ！」

ルナの目は赤く腫れ、彼女が泣き明かしたのがわかってしまう。

「すまん……俺に力がないばかりに。そういやリック、お前どうして？」

「疑いが晴れて釈放されたんだよ。僕が捕まっている間に零式を持

った『ソウルイーター』が現れたからね……」

「ミランは？」

リックは首を振った。

ルナはまた泣き出しそうな顔になっている。

「ちくしょう……許さねえ……!　二人とも、行くぞ！」

ザードはもう身体を自由を取り戻し始めていた。

一刻も早く行かねばならない　罪を問うために　その思いが溢れていた。

眼下に広がる都市を睥睨し、彼は自分が守り続けてきた街と別れを告げようとしていた。

「欺瞞の上に造られし街よ　その役目を終える時が来た。私が終

止符を打ち、真理の名のもとに全てを浄化させてやるう」

その時、背後で突如扉が開け放たれた。

彼はゆっくりと静かな面持ちで振り返った。

「……またノックを忘れたな、ザード」

「すみません。気持ちが悪く焦ってしまつて……ロベルト隊長、愚かなあなたを止めるために」

ザードたちが赴いたのは本部のロベルトの隊長室だった。

ロベルトは古狼の如くしかし衰えを知らない鋭い眼光をザードに向けた。

「何を言っている、ザード。上司を侮辱するとはいい度胸だな？」

「さ、ザード、どうしたのさ？ キミらしくない」

リックも慌ててザードを止めようとするが、ザードは構わず一歩踏み出して続けた。

「とぼけるな……あんたがすべての事件の黒幕、『ソウルイーター』なのはわかってんだ！」

「なんだって!？」

「ロベルト隊長がですか?……?」

ザードが発した答えに、リックとルナも驚愕を隠せない。

だがロベルトは愉快そうに笑った。

「くつくつく……ザード、お前も冗談が上手くなったな。

私が『ソウルイーター』だと? おもしろい。なら、その証拠はあるのかね?」

ロベルトの眼光がザードを貫く。

「……病院から零式が盗まれた同日、あなたは特別収容所から変装の怪人ゼロを、事件の参考人として連れ出している。その日、あなたはゼロを脅し、リックに変装させて零式を盗ませたんだ」

「何を言い出すかと思えば……くだらん。そんな憶測だけでは証拠にもならんな。私を愚弄した罪は大きいぞ?」

するとロベルトは手の平を出し、その上に火球を生み出した。

炎が室内の温度を上昇させ、熱気に包まれ、三人の額に汗が噴出す。

しかしザードは構わずに続けた。

「隊長、勲章はどうしたんですか？」

「……………」

ロベルトの着衣には勲章が身につけられていない。

ザードがおもむろに掲げたのは、隊長格級の隊員勲章。ザードやリックのものは銀貨だが、隊長格級には金貨が使われている。

「知っていますよね？ この勲章の裏には隊員識別番号が刻印されていることを。そう、この勲章はあなたのものだ。そして、これは昨夜ルナを襲った男と戦闘になった時、俺が取ったもの」

動かぬ証拠を突きつけられ、ロベルトは沈黙した。

やがて窓の方へ向き直り、遠くを見つめながら重い口を開いた。

「本来は私一人で終わらせるつもりだったが……………お前らにも歴史的な瞬間に立ち合わせてやろう」

街の外れに、地図にも記されていない巨大な建造物があった。

それは溪谷の間に埋もれるようにしてひっそりと佇んでいた。ザードたちの三人はロベルトに案内され、「旧軍事兵器研究施設」へと赴いたのだ。

「こんなところがあったなんて……………」

リックは冷たい灰色をした通路の壁に触れた。

何百年も前、大戦時代に突入していた頃に術士たちによって健造されたその施設は、未だに古びてはいなかった。兵器開発によるあらゆる衝撃などに耐えられるよう強靱な素材を使っているのだ。

「ここだ」

先頭を進んでいたロベルトは一つの大きな扉の前で止まった。

まるで中にあるものを封印するかのようになり、重く沈黙する鋼鉄の扉。ロベルトが脇にある入力装置にパスコードを認証させると、扉は地鳴りを響かせながら口を開け、彼らを招き入れた。

「うわあ、広いですう……」

思わずルナも感嘆するほど、その内装は広く巨大だった。

この施設の心臓部となるのだろう。中心には巨大な硝子管と連結した黒い装置が鎮座し、その周囲にはただ空間だけが拓けていた。硝子管の表面には黒い遮光膜が覆い中を見ることはできない。

「お前らは、精霊とは何なのか知っているか？ ルナ、答えてみる」

ロベルトは硝子管まで歩み寄りながら問い掛けた。

「はいっ、精霊は、いわゆる霊的存在体、または非物質生命体という正式学名で分類され、あらゆる物質生命と共生し、その不安定な存在を安定させることができるのです。そして、人間や動物の場合には出生と共に赤子の精神に精霊が降臨することがわかっています」

「よーするに精霊つてのには目には見えない生物で、生まれた瞬間に人間の精神に寄生するってことたる？」

ザードの乱暴な解釈にリックは顔をしかめる。

「それじゃ身も蓋もないね……それに、寄生とは違うよ、人間だつて精霊が精神にいなきや死んでしまうんだ。原理はわかってないけど……精霊が人間の生命エネルギーを外に逃げないように制御してるという説が有力かな」

それまで黙っていたロベルトはおもむろに口を開く。

「そうだ……精霊と生物は別々の存在。しかしそれでは矛盾が生じてくる。精霊は生物の精神に憑依し自己の存在を安定させ、生物から切り離された場合は時間と共に消滅してしまう。だが生物は、精神に精霊が宿らなければ死んでしまう。ということは生物と精霊は同時に誕生したのか？ そんな天文学的な確率の偶然は考えられない。そこで一つの推論が提唱された」

「まさか、“分裂理論”？」

リックはハツとして呟いた。

するとロベルトは硝子管の装置を入力する。

「まずはこれを見てもらおう……」
硝子管を覆っていた黒い外装　遮光膜が反転し、自動で解体された。

すると硝子管の中には緑色をした液に満たされていて、小さな肉塊が浮かんでいる。人間とは違うが、良く似ている姿をした赤子に見えた。

「なんだよ、これ？」

ザードは冷たい手が自分の心臓を掴むのを感じた。

リックとルナも未知の存在に畏怖し言葉が出ないようだった。

「これは　“創造主”だ。我らのな……」

ロベルトは静かに告げた。その瞳は恍惚に妖しく塗れ、“創造主”を見つめている。

「やっぱり……そういうことか……まさか、本当に存在したなんて」

リックは震えルナの顔も青ざめている。

ザードだけが理解できていず、地団駄を踏む。

「だあああ！　お前らだけで納得するな！　何なんだよ、分裂理論だの、創造主だの！　説明しろよ！」

「分裂理論……それは精霊と生物が元々、一つの存在だったという説だよ。その存在が何らかの理由で微細に分裂し、生物と精霊が誕生したんだ。その元の一つの存在が　創造主」

リックが説明したが、ザードはまだ理解できていなかった。

構わずにロベルトが後を継ぐ。

「媒介となる生物　人間と火、水、木、金、土、全ての属性の精霊をこの特殊な装置で融合させた。心配するな……人間は死刑囚の者しか使っていない」

ザードは厳しい眼差しをしたが、ロベルトは表情を変えなかった。

「そうか……大戦時、“分裂理論に基づく創造主の再生”という、幻の軍事研究があったのを聞いたことがある。それが本当にこの施設で行われていたんだ！」

リックの言葉にロベルトが頷く。

「当時の技術では研究が不可能となり廃止され永き放置と同時に忘れ去られた。精霊について調べていた私はこの研究に行き着き、研究者としても優秀な部下だったイリスとミランに協力させ極秘に研究を始めた。だが奴らは、実験が成功に近づくにつれ恐れるようになった。そして研究を阻止しようとは画策しているのを知り、ちょうど足りない精霊を持っていたので零式を使って研究の礎に」

「《剛剣創装ブレミス》ッ！」

突然、ザードが剣を創造しロベルトへと疾駆した。

隙を突いた一撃はしかしロベルトの剣によつて受け流されてしまふ。

「全く、人の話をまともに聞く事もできんのか？」

「ごちゃごちゃとうるせーんだよ！ もういい、あんたを逮捕してこのくだらない遊びも終わりにしてやる！」

「くだらない遊びだと？ 貴様……なら研究の成果のひとつを見せてやろう！」

ロベルトは間合いを取り、二本の剣を掲げた。

剣は今まで見たものと違い、巨大で無骨な造りをしていた。刃には何やら刻印が彫られている。

「さあ姿を現せ、双龍よ！」

「!?!」

ロベルトが叫ぶと、二つの剣は輝き鳴動した。

眼を貫く閃光と、全てを揺るがす振動。ザードは眼を庇いながら見上げ、それを見てしまった。

紅く燃える邪悪な瞳。

それは二対の巨大な猛禽類の翼を広げ、爬虫類の如く頑丈な鱗で身を覆っている。筋肉繊維の詰まった太い二本の腕を伸ばし、幾つもの角を構えるその頭部に紅い眼を爛々と輝かせ、生物の王の如く彼らを睥睨していた。

「り、竜だつて……!?!」

「すごいですう！」

二つの剣先は著しく変化していた。

刃の代わりに太古の時代に存在したとされる竜が君臨しているのだ。その巨大な双龍には物理的な重さがないのか、ロベルトは平然と剣を掲げている。

「不完全な融合実験によつて遺伝子情報に眠っていた古代生物の竜になったのだろう。だが、私が求めているのは全ての始祖たる創造主。使い道がない失敗作を処理しようとしたところ、物質に精霊を定着させることが可能だとわかつてな……自己精霊に干渉するのと同じように、剣に触れこの竜に干渉することで容易く召喚できるのだよ」

ロベルトはザードたちの驚愕する顔に満足そうな笑みを浮かべた。「さあ、お前らの力を見せてやれ！」

双龍は咆哮すると、精霊術を行使した。

右手の竜は口を開き蒼い炎を吐き出した。左手の竜は念動により施設の床を盛り上げザードを飲み込もうとする。

「くっ!？」

迫り来る床の津波を側転で躲すが、蒼い炎は意思を持っているかのようにザードを追跡して飛んで来る。体勢が崩れ回避は無理だと悟ったザードは己の精霊に呼びかけた。

「《剛障壁ウブア》!!!」

炎が眼前に迫ったとき、発動した術により鋼鉄の壁が立ち塞がった。

炎は鋼鉄の壁に直撃し爆発して消滅した。

「フン、遊びはこれくらいでいいだろう……そろそろ、創造主を覚醒させる」

「ちくしょう……」

ロベルトが剣を振り下ろすと竜は閃光を発し元の剣へと姿を戻した。

するとリックが取り乱し叫ぶ。

「覚醒させるって……あれが目覚めたら何が起きるかわかりませんよ！？　どんな力や意思があるのか未知数だ……危険過ぎます！」

先ほどの竜の力を見て、悟ったのだろう。

竜や精霊ひとつでも凄まじい力を秘めている。その始祖たる創造主が、如何なる力を有しているのか、そしてその力をどう使うのか予測は不可能だ。

「ああ、イリスやミランもそれに怖気づき実験を阻止しようとしたが私にはわかるのだよ……創造主は絶対的な力と絶対的な知能をもっている。現世に再生を果した創造主は地上をまず浄化するだろう……現時点で人間が地球を支配しているのと同じこと。絶対的な力をもつ創造主はこの世の支配者として君臨するだろう……！！！」

「な……！！？」

ザードにもロベルトの言葉の意味がわかった。

創造主が目覚めれば、その力ゆえ頂点に立つ為に地球上から人類を抹殺するだろうと言っているのだ。皮肉にも、最も力をもつ人類が生物の頂点に立っているのと変わりはない。

「くくく……フハハハハハ！！！」

ロベルトは硝子管に歩み寄り、装置を素早く操作した。

緑の液体が排水され、硝子が台の中に収納された。冷気を帯びた白いガスが立ちこめ視界を覆い尽くす

第七章【崩壊】

冷気を帯びたガスが視界を覆っている。

暫くしてガスが空気中に霧散すると、薄暗闇の中に冷たい灰色をした壁が現れる。

唸るような駆動音を発する棺桶にも似た形の黒い装置が部屋の中
央に鎮座し、装置から伸びた何本もの管が成人の何倍もの大きさで
そびえる硝子台に繋がっているのが覗える。

「創造主が、目覚める……！！？」

眼鏡の曇りを拭い、リックはそれをしかと凝視した。

台の上には奇怪な姿をした赤子が目覚めたばかりの身体を震わせていた。

「さあ、創造主よ！ 我が言葉に応えよ！」

興奮するロベルトは高らかに叫ぶ。

しかし、創造主は言葉を発することができないのか、ただ苦しげにうめいていた。立つ事さえできないのか四つん這いになって震えている。

「……………」

ザードたちはすでに警戒を緩め始めていた。

立つ事すらできない赤子を前に、ロベルトも困惑しているようだ。

「もしかして、失敗したんじゃないのか？」

ザードの言葉を見無視し、ロベルトは恐る恐る創造主を拾い上げた。

創造主 赤子は潰れたような顔面を歪ませ、笑ったかのように見えた。

「馬鹿な……………馬鹿なツ！？ 理論上では間違いはないはず
なのだ……………くそ！！ やり直しだ、消えるツ」

ロベルトは精神の裡を深く潜る　すると赤く熱気に包まれた存在が浮かぶ。ロベルトはさらに近づき、その炎の姿をした精霊に触れ術を引き出す。

「《爆壊バル》!!」

ロベルトの『接触』段階の協力な火行術により、赤子は体内から爆破され肉塊が激しく吹き飛んだ。赤黒い体液がロベルトを濡らす。「ひどいですつ……」

さすがにルナも目を背けてしまった。

ザードは歎息し、ロベルトへ歩み寄る。

「あんたがやったことは全て無駄に終わったようだな。さあ、大人しくしろ。殺した術士達に罪を償うんだ……」

「畜生、畜生、畜生畜生畜生畜生!!」

ロベルトは完全に我を忘れ飛び散った肉塊を踏み潰していた。不意に、その脚が何者かの手に掴まれる。

「……!?!」

先ほど爆破されたはずの赤子が、やや大きくなりロベルトの足元で立っていた。

赤子が何事かうめいた瞬間、掴まれていたロベルトの脚が爆裂し吹き飛ぶ。

「ぐがあああああ!?!」

ロベルトが行使したのと同じ術だ。ロベルトは片足で倒れ、激痛にもがき苦しむ。

「アあ、ああ」

赤子はロベルトに興味を失ったのか、今度はリックに向き直りよたよたと歩いてくる。

「こ、こっちに来る!」

「リック、そいつに手を出すな!」

しかし赤子は覚束ない足取りで、しかし異常な速度で距離を縮めてくる。

後退りするリックのすぐ眼前まで迫っていた。

「そ、そんなこと言ったって、うわああ! 《飛氷戯ルボク》!」
刹那、リックの手前で人の頭ほどもある氷塊が発生し弾かれたよ
うに飛び出した。

氷塊は赤子の顔面に衝突し、その首をもぎ取ってしまう。

「う………! 《飛氷戯ルボク》!」

首を失っても赤子の身体はリックへと迫った。

恐れを為したリックは再び術を行使し、氷塊が赤子の身体を吹き
飛ばす。

しかし、思わず後退りしたリックの脚を誰かが掴んだ。

「ああ」

吹き飛ばされたはずの赤子が、また出現した。

醜い顔を歪ませて笑っている。リックは恐怖に凍りつき反応でき
ず固まっていた。

「ばかやろう! 《雷烙白撃ライヴン》ッ!」

ザードは即座に術を行使し、ザードの頭上で発生した強烈な電撃
が迸り赤子を打ち貫く。

赤子の身体は黒くただれて潰れた。肉の焦げた嫌な匂いが立ち込
める。

「ああウ………」

次の瞬間にはもう赤子がルナの背後に立っていた。

幼い子供ほどに成長している。

「ルナ! 後ろだ!」

「えっ!?!」

ルナが振り向く前にリックが飛び出して彼女を突き飛ばす。

すると、轟音と共にルナがいた空間に凄まじい電撃が降り落ち床
をえぐった。ザードの術の威力を遙かに上回っていた。

「なるほど………創造主は成長するのか! ならば………」

・《邪炎喰イブガ》!!」

額に脂汗を浮かべ激痛に耐えながら、ロベルトは倒れたままの姿
勢で術を行使した。

ロベルトの頭上で生まれた炎は尾を引きながら赤子へと飛来した。赤子は一瞬にして火炎に包まれたた打ち回る。

「ザード！」

いつの間にかザードの横に赤子が立っていた。

もう成人に近いくらいまで成長している。しかし奇怪な醜い姿は変わっていない。

「おわあッ！！」

ザードは咄嗟に飛び退り伏せた。

するとザードが立っていた空間から壁までの距離を突如発生した炎が舐め尽くした。

「どんだん術の威力が増してる……このままじゃ危険だ！
みんな殺される！」

「まだまだ！ 《爆空球バース》ッ！！」

空中に巨大な球形の炎が発生すると赤子の頭上まで飛び、爆裂した。

凄まじい熱波と暴風が吹き荒れ、ザードは直撃は避けたものの吹き飛ばされて装置に激突した。

「ぐあー！」

意識が朦朧としながらも、ザードは片膝をついて立ち上がる。

するとリックとルナは、新たに出現した赤子の炎の術をなんとか伏せて回避したところだった。だが赤子は体制を崩した二人に再び術を行使しようと腕をあげた。

「く、そ……！！」

「フハハハハハ！」

側で倒れているロベルトは狂気に支配され哄笑している。

その姿にザードは舌打ちし、その場にあつた物を拾うと最後の望みを賭けて疾駆した。

「うおおおお！」

ザードは自分より背が高くなった創造主の首筋に零式の針を突きたてた。ロベルトの側に落ちていたのを咄嗟に拾ったのだ。

ELEMENTS! - 鎮魂歌 -

てくれよ。

ザードの小さな咳きは誰にも聞こえなかった。

Epilogue

「《雷烙白撃ライヴン》!!!」

正方形のやや圧迫感のある灰色の部屋。

部屋が狭く、窓には鉄格子が嵌められているのが圧迫感の理由だろつ。

その部屋で突如虚空に発生した稲妻が男の背後に落ち激しく放電し弾けた。

「ぎよえええ!?!」

男は椅子から飛び上がり転がり落ちた。そのまま這いずって逃げようとする。だが目の前に何者かの足が現れ塞がれてしまった。

「まだ取調べは終わってないよ?」

そう言いながら彼は自己精神の裡に潜入する。心の暗い闇の奥底に感じる涼気　その“存在”に向かい、呼びかける。

“我が水を守護する精霊よ　今こそ力を行使せよ”

現実世界の流れとは違い、自己精神の裡では全てが一瞬で終わる。

「《飛氷戯ルボク》!」

彼の“呼びかけ”により、存在から引きずり出された“力”は現実世界で発現する　虚空より生まれ出た人の頭ほどもある氷の塊が、男の眼前に鈍い音をたてて落下した。

「てめえら、いいかげんにしろっ!」

「あれ、ザード、こいつ態度がでかいねえ」

「まあ二回目だからな、リック」

男は喚き叫んでいる。

しかしザードはその男の背中を踏みつけ黙らせた。

「盗賊さん、素直に罪を認めなよ。そうすれば一割は優しくするか

ら

につこりと微笑むリック青年。

「もう、一度は罪は認めたんだが……それに二割減ってるぞ」

「今日はお日様が暖かくて気持ちいいですう。お花に水をあげました……と」

「ルナ、日記は家で書いてくれる？」

「わかりましたあ」

机に座り一人黙々と供述書に自分の日記を記していたルナ。

「あのお盗賊さん、怪我したら病院に行ってくださいネ」

「あれ？ 術で治してくれるんじゃないの？」

男を無視し、ルナはただ微笑みを浮かべている。

「そろそろ飽きたし行くか、リック、ルナ」

「賛成」

「はいです」

三人はそろそろと取調室を後にした。

「……………」

再び一人残された男。おもむろに内線の受話器を取る。

「え〜と、ラーメンと餃子のセット一人前お願いします」

事件から三日が過ぎていた。

施設を脱出したザードたちは直ちに本部に連絡し、すぐに駆けつけた術士総出で崩壊した施設の搜索が行われた。しかし、瓦礫の山からはロベルトも創造主も発見されなかった。

唯一見つかったのはロベルトの二つの剣。

それにより、物体に精霊を定着させるという研究が進められている。

だが動物から抜き出した微小精霊での実験では研究もはかどらないようだ。とは言え、微小精霊を同化させて昇華させる研究のほうも始まった。人間の欲とは限りないものである。

事件がきっかけで明るみになった“分裂理論”と“創造主”の研究のほうは嚴重に禁止された。しかし第二のロベルトが現れないとは限らない。

そのときは今度こそ食い止めてみせる　　ザードはソフィアの墓の前で誓った。

「姉さん………」

ザードの姉のソフィアは、彼が幼少の頃に死んだ。

まだ使えもしない精霊術の訓練中、突如暴発した電撃が木を焼き切り、付き添っていた姉の上に倒れてしまった。幼かったザードには姉を救う力はなかった。

しかしザードは最期にソフィアが遺した言葉に従い、精霊術士になることを決心した。

人のためにその力を使えるようになってね………。

死に行く姉は、ザードを恨むわけではなく、残される彼を思いそう言い残したのだ。

弱々しく、精いっぱい微笑みながら。

「ザード………」

「ザードくん？」

リックとルナに呼ばれ、ザードは我に返った。

今は立ち止まっている場合じゃない、まだまだ前へ進まなければ。あの世で姉に会ったとき、失望されないように。

「ああ、すまん。どうした？」

「せっかく墓地に来たんだし、もうひとつ寄りたい所があるんだけど………」

リックに促され、墓地の奥のほうへ進む。

そこに、影になっている場所にひっそりと佇んでいる墓があった。

「あれ？　誰だろう………」

そういつてリック首を傾げた。

墓は丁寧に掃除され、それだけではなく花も添えられていた。

「………セシルとその子、ここに眠る………」

「隊長の奥さんだよ。一年前に亡くなった」

ロベルトには愛した妻がいた。

リックも街で見たとおり、その妻セシルは子を授かっていた。だが一年前……出産した子には何故か精霊が宿らず、子は生まれてすぐその命を閉ざした。悲しみに暮れ塞ぎ込んだセシルは、後を追うようにして病で亡くなってしまった。

ロベルトは周囲にこそ心境の変化を見せなかったが、内面では荒れ狂っていたのだろう。それがあの事件を引き起こしたのだ。

「……隊長は呪ったんだ。精霊を、この世界を。だから全てを壊そうとしたんだろう……そして知りたかったんだ。何故、自分の子に精霊が宿らなかったのか……それがただ運が悪かっただけのことだとしても、そうだと割り切れることじゃない……創造主が答えてくれるのを期待していたのかも知れないな」

「なんか、哀しいです……」

ルナの表情にも影が落ちる。

するとリックが、ハツとして呟いた。

「創造主は……隊長はどうしたんだろう？ 隊長は親戚もいないし、親しい友人もいなかったはず……でも、この墓を綺麗にしたのはつい最近みたいだよ」

リックの呟きに沈黙が流れる。

その静寂を打ち破ろうと、ザードは声を張り上げた。

「……さあ、行こうぜッ、リックの奢りでメシだ！」

「わあい、うれしいですう」

「えっ、なんで!？」

リックは困惑し慌てふためく。

するとザードは急に恨みがましい目つきでリックを睨んだ。

「崩壊した施設からはなあ、零式が見つからなくて、事件担当者の俺に一億ゴルドの借金をつけやがったんだよあ、あのジジーがッ！ゼロに変装されたお前のせいなのにいっ！」

ザードは我を忘れ、リックの首を絞め付ける。

「ぐえ、が、ガブリエルさんが!? て、変装されたのは僕のせいじゃないよおお!..!」

「高級レストラン いっぱい食べるです」

アスラの一日は今日も平和に暮れていく。

その平和は、彼ら精霊術士たちによって守られているのだ。
そしてこれからも.....

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1797a/>

ELEMENTS! - 鎮魂歌 -

2008年11月7日07時08分発行